

と く  
徳

ほ う  
朋

な ひと  
亡き人とわたし

かねこ だいえい  
金子 大榮



かねこ だいえい

1881-1976

新潟県出身。真宗大谷派講師。近代教学の基礎を構築し、大谷派を代表する僧侶。

私は亡き人を見送る場合に、仏教的な考え方と世間的な考え方があると思います。世間的というのは、送る人の気持ちで自分の心が満足するように考える事です。

たとえば、父を考えると、亡くなった父と生きている父とは何か感覚がちがうのです。生きている父が喜んでくれる方法をもって、亡くなった父を喜ばせることが出来ない。父は酒好きで、お酒の土産をもって帰ると喜びました。だからといって亡くなった父の法名の前へ一升瓶そなを供えてもどうも落ち着かない。「まだそんな馬鹿な事をしているのか」と死の彼方かなたの世界で考えているように思う。そして、「お前もやがて死にゃならん。仏教学者などと偉えらそうにいうておって駄目じゃないか。もっと本気になって自分や他人も救われる道を求めなさい」というているのが亡き父の心のように思います。

そうであるにもかかわらず、生きている父と、亡くなった父との区別を知らない。生き残っている私たちは、亡き人の呼び掛けている声を聞き、そしてその亡き人の心持ちに照らして、生きる私の生活はを恥じてゆくところに、亡き人と私との本当の間柄あいだがらがあるに違いないと思うのです。

このことが一つ解<sup>わか</sup>ってくると随分いろんなことがわかってきます。「戦争で亡くなった人は、今から考えると無駄<sup>むだ</sup>死にされた。どこか残念がっているだろうから、何とか慰<sup>なぐさ</sup>めよう」といって慰霊祭<sup>いれいさい</sup>をする人がいます。それが本当の慰霊祭<sup>いれいさい</sup>でしょうか。そうでなく「私たちは世界が平和になる事を願って死んだのです。どんなことがあっても戦争のない平和な世の中にして下さい。そうすれば私たちが助かるのです」と言っている声を聞くのです。

そして「あなたの死を無駄<sup>むだ</sup>にしません。私たちは本当に平和の道を考えます」と亡き人の願いかえってこそ、はじめて世間的なものが仏教化されて行きます。そのことが親鸞聖人の『歎異抄<sup>たんにしやう</sup>』のおことばです。



(『仏教の人生観』)

8月はお盆期間です。上記の様に亡き人へのこちらからの気持ちのみで行う世間的な墓参りと、亡き人の声を聞き、自分の生活に照らしていく仏教的な墓参りがあります。お互いの思いが行き交う仏教的な墓参りを行っていただければと思います。 (哲弘 拝)



この「徳朋<sup>とくほう</sup>」は仏教を拠<sup>よ</sup>り所としている方々の言葉に直<sup>じか</sup>に触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、頭で分からなくても構わないので気にせず読んでみて下さい。